

# 安全・安心なまちづくりと 住まいを通じ、「幸せ」を支える

Efforts of Enterprises × The future of Tohoku

積水ハウス株式会社



「スマートコモンシティ明石台」では、太陽電池、燃料電池、蓄電池を積極的に導入するなど、東日本大震災を教訓とした「安全・安心」なまちづくりに力を入れています

未曾有の震災から10年、積水ハウスは暮らしの再建・復興を支援し、被災地に寄り添う活動を続けてきました。発災から約3時間後に、静岡工場の備蓄倉庫から支援物資を積んだトラックが出発するなど、迅速に支援を開始。いち早く住まいを提供するため、一棟を2週間で完成させる工事体制により、仮設住宅277戸を建設しました。積水ハウス不動産東北も、みなし仮設住宅（応急借上げ住宅）への対応を実施。全国から延べ58万8,000人（2017年1月末時点）が支援に従事するなど、グループをあげて、復旧・復興に取り組んできました。

災害公営住宅、医療施設、まちづくりなどにおいても、ノウハウを結集し、被災地を支援してきました。2019年に竣工した「石巻市新蛇田南D地区」をはじめ、岩手、宮城、福島の被災3県で、492棟147戸の災害公営住宅を建設。被災地の医療施設として、福島県双葉郡富岡町に整備された「ふたば医療センター附属病院」の早期完成に尽力しました。震災と原発事故により、救急医療機関が休止していた福島県双葉郡では、17年4月に帰還困難区域を除き、避難指示が解除に。帰還住民と復興事業従事者のために、24時

仮設住宅、災害公営住宅からまちづくりまで、ハウスメーカーとしてのノウハウを結集し、生活再建を支援してきた積水ハウス。「東松島市スマート防災工コタウン」の先進的なプロジェクトや地域と連携した防災活動など、さまざまな取り組みを実施。震災の教訓を生かし、災害に強い、安全・安心なまちづくりに貢献しています。

## 早期の仮設住宅の建設や医療施設の整備にも貢献



新入社員による被災地の支援活動として、仮設住宅の風除壁設置作業を行う様子。東日本大震災の翌年から毎年、被災地の復興支援に取り組んでいます

津波で甚大な被害を受けた東松島市での「スマート防災工コタウン」の取り組みも注目されます。これは、復興事業とともに「環境未来都市」づくりを進めることで、積水ハウスが官民一体で取り組んだプロジェクトで、自営線によりマイクログリッドを構築し、エリア内でのエネルギーの地産地消を実現。また、いざという時に周辺の病院、公共施設にも電力を供給できる仕組みで、災害に強いまちづくりのモデルとして期待されています。

積水ハウスは地域と連携して防災の取り組みにも力を入れています。17年9月に、宮城県色麻町と「防災協定」を締結。避難所に指定された同社の東北工場には、250人が7日間生活できるスペースと防災備蓄品が用意されています。災害などによる停電の際も、

これから時代に向け、エネルギーの再生をテーマとした「スマートタウン」を全国で展開していく

ます。東日本大震災後の宮城県で初めての大規模団地開発となつた「スマートコモンシティ明石台」では、震災の教訓を生かした安全・安心なまちづくりが進められてきました。そのコンセプトは、快適で経済的かつ安心な住まいを実現する「スマート」、人と住まいの健康長寿を目指す「ウェルネス」、美しいまちなみづくりや住民同士がつながる「コミュニティー」。また、太陽光発電システムなどの創エネと省エネ設備でエネルギー収支「ゼロ」を目指す住まい「グリーンファーストゼロ」を推進し、環境にやさしい暮らしを実現していく

ます。また、家族が共に過ごせる大空間リビング「ファミリースイート」を提案し

ています。また、家族が共に過ごせる大空間リビング「ファミリースイート」を提案し

ています。また、家族が共に過ごせる大空間リビング「ファミリースイート」を提案し